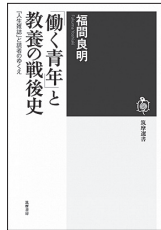


福間良明著

『「働く青年」と教養の戦後史』

——「人生雑誌」と読者のゆくえ』



評者：小林 直毅

人生雑誌とは何か

かつて「人生雑誌」「人生記録雑誌」とよばれる雑誌が広く読まれた時代があった。それは戦後復興にひとつの区切りがついて、この国が新たな経済発展を遂げようとしていた1950年代から60年代半ばである。人生雑誌の主要な読者層は、家計の事情で大学はおろか高校への進学もかなわず、義務教育を終えて集団就職などで農村から都市に流入して「働く青年」たちであった。彼ら、彼女らは「勤労青年」ともよばれたが、今日ではこうした言葉は概念的な意味以上の現実感が失われている。そして、働く青年が読者層となった人生雑誌とよばれるような雑誌も見当たらない。今は馴染みのない人生雑誌とはどのような雑誌であったのだろうか。本書を頼りに概観しておこう。

人生雑誌の代表的なものは、山本茂實によって1949年1月に創刊された『葦』、文理書院が1952年1月に創刊した『人生手帖』である。山本は『あゝ野麦峠』（1968年、朝日新聞社）の著者として知られている。また、『葦』の編集部には、「東京空襲を記録する会」を立ち上げ、『東京大空襲・戦災記』（1973-74年、東京大空襲を記録する会）を編集し、『東京大空襲』

（1971年、岩波新書）を著した早乙女勝元も在籍していた。

『人生手帖』を刊行した文理書院は、寺島文夫が1946年に創業し、白柳秀湖、田中惣五郎、柳田謙十郎、岡邦雄などの人生論、社会科学の書物を出版していた。その文理書院の『人生手帖』の編集部には、のちに大和書房を創業し、みずからも古代史の研究書を著した大和岩雄が加わったが、大和はもともと『葦』編集部に在籍していた。

このような編集者たちの手による人生雑誌は、1950年代半ばに隆盛期を迎える。誌面には、働く青年たちの煩悶を綴った内省的な主題の手記や投稿が多く掲載された。同時に、「生き方」「読書」「社会批判」を主題として、柳田謙十郎、戒能通孝、杉捷夫、野間宏、亀井勝一郎といった哲学、政治学、文学などの領域の知識人の論考も掲載された。それが、学歴エリートではない働く青年たちに読まれていたのである。当時、『中央公論』の発行部数が12万部、『世界』が10万部、『改造』『新潮』が5、6万部であったのにたいして、『葦』や『人生手帖』の発行部数は8万部にのぼっていた。

大衆教養主義と反知性主義的知性主義の言説

著者は、内省的な「生き方」「読書」「社会批判」を主題とする人生雑誌が、働く青年たちに読まれていたところに、「『読書を通じた人格陶冶』という教養主義の規範が垣間見える」（17頁）とする。その上で、そこに「学歴エリートやインテリに対する彼らの鬱屈や反感」「劣等感」「屈折した思い」（23頁）がないまぜになった、「知・教養への憧れと同時に、知識人層への苛立ち」（28頁）を併せもつ大衆教養主義の現れを見出す。

本書の標題には「教養の戦後史」とある。しかし、学歴エリート層の教養主義とは対抗的で

あろうとさえする大衆教養主義の盛衰に本書の照準は合わせられている。むしろ、そうすることによって、かつて大学や旧制高校の学歴エリート層、知識人に担われていた教養主義が退潮していく姿もまた浮き彫りになっていく。これが本書の魅力にして注目すべき成果といえるだろう。

本書では、大衆教養主義と名指された文化が、戦後の雑誌文化の一角に現れた人生雑誌というメディアにけっして閉じ込めて論じられてはいない。学歴エリートと大衆を区分し、いずれか一方に焦点化したメディア文化研究とその歴史像を再考しようとする視点が明確だからである。

著者は、人生雑誌に、「インテリと大衆がぶつかり合いながら絡み合う状況」(22頁)を見出す。そこに、「大衆層であっても、娯楽のみに埋没することを厭い、上級学校への進学への憧れを抱いたり、知的なもの(文学、哲学、倫理など)に関心を抱く人々」(22-23頁)として、人生雑誌の読者である働く青年が措定される。

たしかに、働く青年をめぐるさまざまな問題は、これまでも、階層構造と階層移動に 관한研究、労働問題研究、労働社会学などによって研究されてきた。とりわけ、学歴が人びとの階層的地位を規定しているだけではなく、昇進、昇給の機会を左右し、階層移動も可能にしていることは周知のとおりである。ところが、学歴が経済的格差と抜き差しならない結びつきをもってしまうと、それは階層的格差を固定化し、再生産するようになっていく。

このような階層社会にあって、上級学校への進学を望みながら、経済的格差ゆえにそれがかなわなかった働く青年たちにとって、学歴はどのような意味をもっていたのか。本書では、「彼らが具体的にいかなる鬱屈を抱き、そのことがどのような文化を生み出したのか」(21頁)という問いが提起される。そして、「経済や労働

環境の観点からだけでは把握し得ない彼らの心性や知的営み」が明らかにされていく(21頁)。その一端は、『葦』(1955年11月)に投稿されたつぎのような手記に現れているだろう。

「学校へ行きたいと思う心がどんなに強くても、家人の反対で夜学にも行け」なかったある読者(会社員、一五歳)は、かつては「何て不合理な世の中なんだろう、どうしてうまい具合にいかないんだろう」という思いに苛まれつつも、のちに「読書が何よりの勉強で、読書する事によつて、学校では学べない事迄、はっきり知る事ができるようになり、「学校へ行かなくとも自信を持つ様にな」ったことを記している(57頁)。

働く青年のこのような屈折した心性を語る言表の出現領野こそが人生雑誌であったのだ。そしてそうした言表は、「反知性主義にもつながるようなインテリ層への憎悪」と「知・教養・知識人への憧憬」とを両立させた一種独特の言説へと編制されていく(62頁)。この「両立」を可能にしたのが、「知識人が占有する知を奪取しようとする欲求」(63頁)である。「高等教育を受けられなかったにもかかわらず、知や教養に憧れを抱くことは、必然的に知識人層によって知が独占されていることへの嫌悪を生む」(63頁)。そこに著者は、「知識人とも対等であろうとする平等主義的な価値観」(63頁)を見る。本書では、このような言説の棲み処としての知が、「反知性主義的知性主義」と名指されることになる。

働く青年の社会批判

人生雑誌の隆盛期となった1950年代から60年代半ばに顕在化した貧困と格差、農村の困窮、劣悪な労働環境と労働問題といった社会問題は、

働く青年たちの生活そのものであったといつてよい。それらの多くが、人生雑誌ではその読者層としての働く青年たちの当事者性をもって具体的に語られ、論じられていたのである。

困窮する農村から集団就職で都市に流入して零細企業で働く青年たちは、労働組合もないような労働環境に置かれていた。そこは、「学校で教わった『民主主義』『労働者の権利』とはまったく異質な世界」であった(129-130頁)。「『人生手帖』の読者の一人が語る労働問題を、著者はつぎのように読み解いていく。「『人生手帖』やその読者サークルである緑の会にふれるなかで、『工場をよくするために団体交渉をすることの大事なの』を認識し、『冗談ばかりいっている』ような同僚を尻目に『社会科学の本』を手に取り、『政治のこと』を思考しようとするさまがうかがえる」(150頁)。

働く青年たちは、読書をつうじてみずから置かれた階層の状況を了解し、思考していく。それが、「冗談ばかりいっている」ような同僚にたいする優位さえも意味する言表となって語られるのである。彼ら、彼女らにとって人生雑誌を読むことは、自負にも似た何かを覚えさせる経験でもあったのだ。

再軍備問題もまた、人生雑誌では論じられている。しかし、働く青年たちの社会批判となって論じられる再軍備問題は、『世界』や『改造』といった総合雑誌で論じられるそれとは異なっていた。「人生雑誌では農村の貧困や二三男問題との関連で警察予備隊や自衛隊が論じられることも少なくなかった」(115頁)のである。ここにも、働く青年たちが、みずからの置かれた階層の状況に依拠した社会批判として、再軍備問題を具体的に論じようとする言説実践が見出されるだろう。

学校では学べないことを、はっきり知ることができるようになり、学校へ行かなくとも自信

をもてるようになった働く青年たちの社会批判は、当事者性と具体性をもって繰り返された。それはまた、進学がかなわなかった鬱屈、劣等感を晴らすかのように、上級学校では学べないこと、学校へ行かなくとも知ることができるようになったこととして社会問題を語り、論ずる、働く青年たちの社会批判でもあったのだ。ここに、知・教養への憧れと知識人層への苛立ちを両立させた反知性主義的知性主義の言説の特徴が如実に現れている。

と同時に、総合雑誌で論じられる知識人や学歴エリート層による社会批判の当事者的具体性の乏しさにたいする苛立ちにも似た、大衆教養主義の批判的態度も垣間見られるのではないだろうか。はたして知識人や学歴エリート層は、このような批判的な眼差しに応えようとしていたのだろうか。あるいは、どこまで応えられたのだろうか。本書は、こうした問いも示唆している。

大衆教養主義と人生雑誌の没落

人生雑誌では、仕事に役立つような技術を学んだり、学歴を得ようとしたりする「実利」に直結する勉学をことさらに忌避する言説が編制されていた。著者はこれを、反知性主義的知性主義における「実利」の忌避と学歴エリート層にたいする「転覆戦略」とよび、その逆説に注目する。

こうした言説には、「高校や大学での『就職進学に有利な為』の勉学のいかがわしさと、それに拘泥しない『就職組』の崇高さ」「『生き方』や『教養』にこだわる求道的な姿勢」「実利や肩書きを求めて齷齪する(ように見える)『進学組』への優位を語ろうとする『就職組』の欲求」(162頁)を意味する言表が配分されている。しかし他方でそれは、「学歴や実利の汚らわしさをことさらに強調することの背後

に、学歴への憧憬が固着していたこと」「高等教育の学歴への憧れ」(162-163頁)を意味するものでもあった。「求道的な『生き方』『教養』への志向をもって『進学組』への優位がことさらに叫ばれた背後には、『進学組』の劣位にあることへの鬱屈と彼らへの憧憬が、分かちがたく絡まっていた」(164頁)。

ところが、高校進学率、大学進学率の上昇が、こうした言説編製の戦略を失効させ、人生雑誌と大衆教養主義を没落させていく。とりわけ、大学生数が増加し、大学生がエリートではなくなるとともに、大学の価値は低下し、さらに大学紛争も加わり、教養の輝きも霞むようになっていく(241-244頁)。そうしたなかで、人生雑誌でも、「古今東西の人文社会科学の知識人の名を自らの手記に散りばめ、知的に『背伸び』をしようとする読者投稿が皆無に近くなった」(244頁)。

こうして、高学歴化とよばれるような階層構造の変化が、学歴エリート層によって担われてきた教養主義の凋落とともに、大衆教養主義の没落にもつながっていく。それが、本書では、働く青年たちにとって高学歴化がどのような意味をもっていたのかに注目することで解き明かされるのである。「学歴への憧れは相対的にうすれ、また、進学できないことへの鬱屈も社会的には目立たなくなりつつあった。だとすれば、知識人への反感に根差した知への憧憬、つまり、反知性主義的知性主義は成立しにくい」(245頁)。

さらに大学紛争が、知識人や学歴エリート層による教養主義だけではなく、それとは対抗的であろうとする大衆教養主義の没落も決定づけることになる。人生雑誌では「知識人批判を繰り広げる学生たちが批判の対象にされている。経済的に高校に進学できなかった勤労青年たちの眼には、大学紛争は、せいぜいエリートたる

ことが裏切られたにすぎない大学生たちの高踏遊戯にしかに見えなかった」(246頁)のだ。たしかに「人生雑誌の反知性主義的知性主義は『大学解体』を叫ぶ学生たちの欲望や立ち位置への無自覚を炙り出すものではあった。だが、彼らに代わって自らが知を模索しようとする思いは、かつてほど掘り下げられることはなかった」(248頁)。

1970年代になると、人生雑誌では公害、とりわけ食品公害が社会批判の対象として取り上げられるようになる。しかし「そこで重きが置かれたのは、公害を私的な問題として捉え、自分自身を公害から守ろうとする姿勢である」。「『健康』という主題は、こうしたなかから見出されたものであった」(257頁)。人生雑誌は「『健康』という実利を追求する雑誌へと転じて」いく。そして「『実利を超越した真実・生き方の模索』という大衆教養主義はここに潰え、人生雑誌というメディアは、その幕を閉じることとなった」(275-276頁)のである。

「知・教養・知識人」的なるものを問う視座

反知性主義的知性主義の言説は、一見すると、知識人や学歴エリート層に担われた教養主義との対抗軸によって編制されているように考えられるかもしれない。しかし、本書では、そのような単純な対抗関係ではなく、反知性主義的知性主義の言説が「インテリ層への憎悪」と同時に、「知・教養・知識人への憧憬」も意味するものとなって編制されていることが丹念に明らかにされている。

そこで見えてくるのは、知・教養・知識人への憧憬が、働く青年たちが求めながらかなえられなかった「学歴への憧憬」「高等教育の学歴への憧れ」でもあり、かなえられなかったからこそその鬱屈や反感にほかならない。それゆえ、高学歴化が進み、学歴エリート層や知識人に担

われていた教養の輝きが霞んでいくと、このような言説の編制軸は失われてしまう。本書から見えてくるのは、結局のところは、学歴によって規定される階層社会とその文化に絡めとられてしまった反知性主義的知性主義、大衆教養主義の文化の姿なのだ。

高度経済成長期の階層構造の変化、教養主義と大衆教養主義の道行きをともにした没落を経験したのちの今日、「知・教養・知識人」的なものへの反感が顕著に現れている。本書の序章でも、「知や知識人層への憧れと反感が両立するような状況は、今日ではあまり見られない」という現状認識とともに、つぎのような問いが提起されている。「知の希求を掻き立てるような知識人批判は、なぜ見られなくなったの

か。知識人への反感や違和感が語られるなかで、なぜ知や教養の模索が抜け落ちていくようになったのか」(29頁)。本書の緻密な考察は、「知・教養・知識人」的なものをめぐる現代の状況を、階層構造や階層移動、経済的格差をめぐる心性と文化の歴史として読み解く視座を導き出しているのである。

*本書は、2017年度サントリー学芸賞を受賞した。

(福間良明著『働く青年』と教養の戦後史——「人生雑誌」と読者のゆくえ』筑摩選書0141, 筑摩書房, 2017年2月, 347頁, 定価1,800円+税)

(こばやし・なおき 法政大学社会学部教授)